

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：24201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730397

研究課題名（和文） 戦後日本における地域伝統芸能の変容と「地域活性化」に関する（歴史）
社会学的研究研究課題名（英文） Historical and Sociological Study of Regional Revitalization through
Reorganization of Local-Folk Festivals and Performing Arts

研究代表者

武田 俊輔（TAKEDA SHUNSUKE）

滋賀県立大学・人間文化学部・講師

研究者番号：10398365

研究成果の概要（和文）：

本研究では滋賀県長浜市の長浜曳山祭、及び山口県上関町祝島の祝島神舞の2つを主な研究対象として地域の伝統的祭礼・芸能がどう再編成されたかを明らかにした。伝統的な商家町で、90年代から観光化した長浜における前者については、祭祀組織（山組）と囃子保存会を中心に、自治体・観光協会、観光産業や商工会・青年会議所との関係から祭の再編過程を明らかにした。後者については原発への賛否をめぐる中止と原発反対派による復活、また島出身者や島外からの移住者の参加の中で、いかに祭礼が再編成されたか分析した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I investigated reorganizations of local-folk festivals and performing arts with depopulation and aging, development for tourism, designation of cultural property, and participation of immigrants. The main objects of study is two festivals. One is Nagahama Hikiyama Festival, in Nagahama city of Shiga Prefecture, a traditional merchant town and a famed tourist spot since 1990's. I inquire how festival group called Yamagumi, and society for the Preservation of festival music (Shagiri Hozonkai) reorganize festival in collaboration and conflict with the government of a municipality, tourism industry, chamber of Commerce and Industry, and youth Chamber of Commerce

Another object is the festival called iwaishima kanmai. This festival, held in Iwaishima Island of Yamaguchi Prefecture, was once canceled because of conflicts between the pros and cons of building a nuclear power plant, and resumed by villagers who opposed to it. I analyzed the process of reorganization of festival in relation to developing of anti-nuclear movement, and inquired how it is maintained with participation of emigrants from Iwaishima, and immigrants to Iwaishima.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：地域伝統芸能 文化財 観光 祭礼 歴史社会学 文化の客体化

1. 研究開始当初の背景

近年、1992年に制定された「地域伝統芸

能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律」（通称「おまつり法」）の地域社会への影響という観点から、1990年代以降の地域の伝統芸能の観光資源化という現象に対して、観光人類学・民俗芸能研究・環境社会学のそれぞれの分野で研究が行われている。そうした中でそうした芸能が観光客の視点を介在して（再）創造された「創られた伝統」（E・ホブズボーム）であることは多くの研究者によって指摘されている。こうした地域社会における伝統の創造について、「文化の客体化」（太田好信『トランスポジションの思想』世界思想社、1998年）といった観点から着目し、観光というコンテクストの中で現地の人々の主体性が発揮される面を強調するものも多い。

例えば担い手たちが文化財保護政策や「おまつり法」、また観光やイベントという文脈をいかに利用しつつ芸能を実践しているかに着目した議論（俵木悟「民俗芸能の実践と文化財保護政策」『民俗芸能研究』25号、1997年、等）や、研究者から見れば近年の産物である芸能について、担い手はいかにして「伝統」というリアリティを保持しているかを論じる、環境社会学からの研究も見られる（足立重和「伝統文化の説明—郡上おどりの保存をめぐる」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社、2000年、等）。

本研究の関心は、俵木や足立等が着目している地域伝統芸能の担い手とその芸能をめぐる意味づけの言説といったミクロな視点というよりは、芸能を取り巻く文化的エージェントの関係性が編成されていく状況から、戦後の地域社会の構造変容とエージェント間の布置連関を、地域伝統芸能という切り口から描き出していくところにある。その点で岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』（吉川弘文館、2007年）に見られるような、国家による「ふるさと」の政治的な資源化と愛郷心・愛国心の涵養といった議論や、世界遺産や文化的景観といった新たな価値づけが地域にもたらす影響に関する研究は、筆者とも近い視点にはある。

しかしながら、ここで挙げた諸研究においてはいずれも、こうした地域伝統芸能を通じた地域おこしや観光といった現象を、90年代以降的な現象としてのみ把握していない。だが、既に戦前期から、観光産業や地域振興、そしてそれに关わる諸エージェントの関係性を通じて類似の状況は存在し、その度ごとに芸能も、また地域社会も変容してきたのであり、1970年代もそうした類似の状況において文化財指定と観光化が進行してきたこうした歴史的な射程の中でこれらの現象はとらえられなければならない。

そしてもう一つの問題として、「文化の客体化」論的な研究の多くは、特定の地域にお

ける地域伝統芸能による「客体化」のバージョンの多様性を看過する傾向にある。各地の芸能を見ると、同じ地域にある同じ名前の芸能であっても、実際には複数のバージョンが並立して存在しており、それぞれのバージョンの違いに応じて異なる地域アイデンティティや歴史意識が重層している状況にでくわす。しかしながら、いわゆる「文化の客体化」論もその批判者も共に、地域社会とそこでの文化の担い手を、過度に一枚岩化してしまっている。同一地域において芸能とその担い手が創り出す複数の客体化がせめぎあい、また時に併存していくという状況を視野に入れて、その競合のプロセスをも視野に入れた研究を行っていく必要があるのである。

2. 研究の目的

筆者はこれまで近現代日本において地域社会がナショナルな共同性に組み込まれて（と同時に地域社会で大きな役割を果たすエージェントとの関係性の中で、逆に国民国家の一部へと地域社会を組み込んで）いく中で、地域的なアイデンティティが再構築・再編成されていくプロセスについて、歴史社会学的な研究を行ってきた。

今回の研究課題はこうした申請者自身の研究を踏まえつつ、戦後日本社会における地域の「伝統」芸能の（再）編成、そして地域の社会構造の変化を、民謡・芸能の担い手と、芸能に対して大きな影響を及ぼす諸エージェント（具体的には文化財行政・観光産業・地方新聞社・放送局・民謡及び民俗芸能研究者・商工会や青年会議所・保存会・研究者・NGOなど）が取り結ぶ関係性とその変容の分析を通じて明らかにすることを目的としている。その際に、上記のような歴史的射程と「文化の客体化」論の問題点を踏まえつつ、分析を行うところに本研究の意義がある。

3. 研究の方法

本研究は①滋賀県湖東・湖南地域を中心に広がり、また楽器や節回しなどが異なる傾向があるものは大阪・京都等に広がる江州音頭、②滋賀県長浜市の長浜曳山祭、③山口県上関町祝島の祝島神舞の3つを研究対象として行った。

研究の方法は、長浜曳山祭については、祭全体を執行する「総当番」メンバーへのインタビュー調査や会議へのオブザーバー参加、さらに祭を執行する各町における、祭の準備から執行に至るプロセスの参与観察調査のほか、大正末～現在に至るまでの「総当番」が議事録を中心的な分析材料とした歴史社会学的な研究を行った。

祝島神舞については祝島神舞奉賛会の中心メンバー、また「上関原発に反対する祝島

島民の会」のメンバー、さらに祭りに参加する反対派住民、また近年新たに島に移住した人々へのインタビュー調査を行った。また奉賛会が所有する過去の祭礼に関する史資料や祭礼実施に関する会議録等も参照した。

また平成22年度にのみ調査を行った江州音頭については、江州音頭に関する史資料の収集と共に、江州音頭普及会事務局や普及会と密接に関わる現役の音頭取り、また一方で普及会に加入していない音頭取りや、各地の江州音頭の盆踊りに参加し、時には自身の創作した踊りを披露する踊り子グループを中心にインタビュー調査を行った。

4. 研究成果

(1)平成22年度の成果

いずれも滋賀県の祭礼・伝統芸能である江州音頭と長浜曳山祭を中心に研究を行った。まずは滋賀県各地で戦後、滋賀県の観光行政とも結びつく形で踊りや保存団体などに大きな変容があった、戦後の江州音頭の変容について研究を行った。1957年の八日市商工会議所の支援で江州音頭振興会が結成されて新しい唄が作られ、商工会議所・振興会・八日市観光協会の依頼で、現在一般的に広く行われている踊り方が作られたプロセスや、江州音頭を若者や他地域の人々にも普及させ、県のイメージアップや観光客の誘致に役立てるという意図から、1984（昭和59）年の滋賀県の商工観光課（当時）による江州音頭普及会の結成、さらにYOSAKOIソーランの影響を受けた「江州音頭ニューウェーブ」の動きなどを調査した。その上でそうしたニューウェーブへの従来の音頭取りの反発や、新たな踊り子グループの参入に対する盆踊りを主催する地域住民との摩擦や受け入れといった状況を明らかにした。こうした状況から、芸能の真正性をめぐっていくつものバージョンがどのように競合し、そして併存していくのかについて分析を行った（「5. 主な発表論文等」のうち図書④）。

またこの年度の1月からは長浜曳山祭に関する参与観察・インタビュー調査を開始した。これによって祭全体、および特定の町に密着した形での、準備段階からの調査を行い、参与観察記録を作成した。

(2)平成23年度の成果

引き続き長浜曳山祭に関する参与観察とインタビューを行うと共に、史資料の収集・分析を通じて、（一部戦前も含めてはいるが、主に）戦後を対象として、民謡や芸能を取り巻く社会的基盤と、それらと結びついた様々な文化的エージェントが地域社会において織り

なす関係性を中心とした歴史社会学的分析を行った。

中心的に取り組んだ研究対象としては、昨年度に引き続き、滋賀県長浜市の長浜曳山祭がフィールドとなった。特に（財）長浜曳山文化協会の全面的な協力の下、戦前から現在に至るまでの長浜曳山祭に関する最も重要な資料である「総当番記録」を閲覧して、戦前から現在に至るまでの長浜曳山祭をめぐる諸エージェントの関係性（祭りを担う山組・長浜曳山祭保存会（現在は長浜曳山文化協会）・長浜町（長浜市）が取り結ぶ関係性の中で、祭りがどのように継承され変容したかを歴史社会学的に明らかにした。戦前期においては、長浜の伝統的な商家の経済力を背景として行われていたのがこの祭であったが、戦後はそのままでの維持が困難になるにつれて、次第にその位置づけに新たな意味を加えつつ、存続を図っている。

すなわち商家の経済力による維持が困難になる中で、地域の観光資源としての意味合いをクローズアップさせて自治体からの経済的な支援を得ることで祭りを維持していき、さらに従来は伝統的な商家のみの祭りであったものを「長浜市民」全体の祭りとして再定義することによって、より広範な市民からの財政的支援を得ることを可能にしたこと、またその後には国指定無形民俗文化財として指定されるに至って、それまでの観光志向から一変してその「伝統」性と真正性を前面に出すことで、経済的基盤を獲得していく。観光・市民の祭・文化財といった複数の社会的文脈の中で祭をその時その時に改めて位置づけ直し、祭のありよう自体が再編成されていくプロセスを明らかにすることができた（「5. 主な発表論文等」のうち図書②）。

さらに、研究代表者自身が長浜曳山祭の中心的な担い手である若衆となって参与観察調査・インタビュー調査を行い、都市祭礼である長浜曳山祭の運営組織の現状と課題を、1990年代以降の地方都市の社会構造の変容と結びつけて明らかにすることができた。「文化の客体化」論的な研究の多くは、地域伝統芸能による「客体化」のバリエーションの多様性を看過する傾向にある。長浜曳山祭は12の山組が競合して行われる祭であり、同一地域において芸能とその担い手が創り出す複数の客体化がせめぎあい、また時に併存していくという状況はこうした従来の研究視角では十分に捉えられることがなかったものである。そうした競合関係が、成因にとっての各町（山組）としてのアイデンティティを強化していくと共に、そうした関係性自体が

、各山組の垣根を越えた「長浜」の「町衆」全体の一員としての枠組みの中にそれぞれの町を再定義させる契機となっていることを明らかにすることができた。

さらに芸能を社会的に考察する上でのメディア論的な視点として、柳田國男の民謡論・口承文芸論の再検討を行った(図書③)。

(3)平成24年度の成果

長浜曳山祭の調査を継続し、特に中心市街地の空洞化・高齢化が進行することで祭を存続させる上で課題を抱えつつあり、町外出身でありつつも、そうした山組に新たに新規加入する者を、一定の条件付きで受け入れつつある町(山組)に注目して、そこでの新規参入者の位置づけと、新規参入者の山組に対する帰属意識と従来からの若衆のそれとの違いや両者の関係性を中心に分析を行った。

またこの祭は戦後、囃子方や曳山(移動舞台である山車)の曳き手(山曳き)といった、従来は町外の農村から人を雇うことによって賄われていた、祭りを継続する上で不可欠な人材が確保できなくなった。そうした中で、囃子方については、町の垣根を越えた囃子保存会が成立し、保存会に参加した各町の若衆が町内外の子どもを育成し、そこから男子は祭を執行する町の若衆へと参加するという子どもの時期からの年齢階梯制が、戦後になって発生していくプロセスを明らかにした。かつては町内でもごく一部の男子しか参加できず、また有力な商家を中心として成立していた祭であったものが、町内の男子、また多くの町では女子も含めてたやすく参加できる祭へと移行したのである。さらに町外からも囃子に参加し、そこから若衆に参加するという形で、新たな祭の担い手が発生していく。囃子保存会・学校などを巻き込んで発生した、そうした戦後の祭の変容とその仕組みが成立するプロセスを明らかにした(以上、図書①)。

また8月～9月にかけて、4年に1度行われる祝島神舞の参与観察調査・インタビュー調査を中心に実施し、かつて島の対岸の原発建設の賛否をめぐることでコミュニティに重大な分裂が起こったがゆえに中断された神舞が、島の大半を占める反原発運動のグループを中心に再開されていったプロセスで、島で生きていくことの意義や暮らしといった原点を再発見し、また原発に反対し続けるための島の人々の力を結集する上でも、祭が重要な意味を持つという反原発運動の観点からの意義が大きく反映したこと、またその過程で祭の再構築と歴史意識への変容が起こっていったことを明らかにした。

また現在の祭の担い手は、①島に在住する島民だけでなく、②島を出た他出子の役割が極めて重要であり(また、その一部は将来的

には帰島する可能性を保持している)、そして③反原発運動に共感し、また実際に運動に参加することを通じて島民たちの信頼を得た移住者や、外部の運動参加者たちの3つによって構成されている。上の祭の意義の再発見は①を中心に行われたものであるが、島民たちが祭、そして集落を継続させていく上でのリソースとして、②・③をどのように受け入れ、継承しているのかについて明らかにした。こうした住民・出郷者・移住者などの三者関係の中でいかに祭が継承されているかを明らかにする研究は極めて少なく重要な意義を持つものである。これについて論じた研究は近々に公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計4件)

①市川秀之・武田俊輔(編著)・滋賀県立大学曳山まつり調査チーム『長浜曳山まつりの舞台裏 大学生が見た伝統行事の現在』サンライズ出版、2012年。

②武田俊輔「長浜曳山祭における社会的文脈の流用 観光/市民の祭/文化財」長浜曳山文化協会・滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科『長浜子ども歌舞伎および長浜曳山囃子民俗調査報告書 長浜曳山祭の芸能』、p.245-256、2012年。

③武田俊輔「柳田民謡論の可能性：歌の発生とその伝承の『場』をめぐる」細川周平編『民謡からみた世界音楽：うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房、2012年。査読無し。

④武田俊輔「盆踊りの輪の排除と包摂—『江州音頭』の現在」滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科『大学的滋賀ガイド—こだわりの歩き方』、2011年、昭和堂。査読無し

6. 研究組織

(1)研究代表者

武田 俊輔 (TAKEDA SHUSNUKE)
滋賀県立大学・人間文化学部・講師
研究者番号：10398365